

324
457

佛敎
捷徑

いろは本義

全



始



色は匂へど散りぬるを
我が昔誰ぞつねならむ
有為の奥山今日越えて
浅き夢みど酔ひもせず

序

本書いろは四十七文字の歌は弘法大師が高野山を開かる、時佛法弘通の捷徑として釋迦如來が雪山の奥に於て身を犠牲として求めたまふたといへる『諸行無常、是生滅法、生滅滅已、寂滅爲樂』の四句の意味を和釋せられて作られしものにて材木を運ぶ者をして此歌を諷ひ乍ら運ばしめ又之を材木の符調にせられたと云ふ傳説もあひます今是れを解釋的に詠めば『咲く花の、色は匂へど、やがてまた、散りぬるもの』をわが世には、誰ぞ常あるものならむ、いざこの有爲の奥山を今日越え出て、あさはけき、夢はまた見じやがてかの、光明界につきぬれば、無明の酒には酔ひもせず』と云ふ佛教の極意を詠じ玉ひしものにて元はいろはの終りに京の一字を加へて四十八字となして讀ましめたるは有爲の奥山今日越えて淺き夢見じ酔ひもせずといふより涅槃寂滅の所を京の都に譬へたるものなるを知らしめんが爲めなりと云ふ深き意味の含まれたるものなれども世人の之を知るもの少なきは甚だ遺憾に堪へざる所と

天正 31
4. 7. 31
4. 辰

二
 今之れを平易に説き明し普く一般の人に知らしめたらんには却つて萬卷の經に勝らんと思ひいろは本義と題し茲に著したる所以なり

大正四年六月

著者識

目次

いろは歌の起原	一頁	我	四五
佛法の概括	二	世	四八
自力門他力門	四	誰	五〇
宇宙の眞理	六	常ならむ	五一
釋尊御一代	九	第三句有爲の奥山今日越えて	五六
拈華微笑	一三	生滅	五九
いろは本文	一八	滅已	六一
涅槃經の四句偈文	一九	有爲	六二
第一句色は匂へと散りぬるを	二一	奥山	六二
諸行	二二	今日越えて	六三
無常	二四	第四淺き夢みじ酔ひもせず	七二
色	二七	寂滅	七四
匂ふ	三〇	爲樂	七九
散る	三五	淺き	八〇
第二句我世誰ぞ常ならむ	四〇	夢みじ(邯鄲夢の枕)	八〇
是生滅法	四三	酔ひもせず	八四
		目次終	

捷徑教 いろは本義

大八木遊道著



いろはの根據

日本の文字といへば假名より外には有りませぬ印度には印度の文字があり支那には支那の文字があり歐米には歐米の文字があります日本は世界萬國の中で誠に小さな國で極東の島國でありますけれども天地開闢以來神仙の住みたまへる靈地にて山水も随つて明媚なれば日本固有の言語音韻も極めて清らかでありますして支那より漢字漢語が渡りましたけれども其儘では日本に通用致しませぬから和訓を施して其の意味を通用せしむることになつたのであります、古代の四十七言は今のいろは四十七文字の音と同じ事に

て少しも増減はありませぬけれども如何にも讀み下りが六ヶ敷いのと書き
苦しいので弘法大師が苦辛なされ支那の草書に印度の梵字の筆勢を交へ工
夫に工夫を加へた結果今の平假名文字を案出せられそれを佛説涅槃經の中
にある四句の文に事寄せ、いろは四十七文字の歌に作らせられ誰にも讀み
易く書き易き様にして多くの者に之を歌はしめ又之を習はしめて知ら
ず識らず佛道に入らしめんとの微妙の方便を起されたる千古不磨の金文に
して意味深く佛法弘通の捷徑として却つて萬卷の經に勝るべく佛法八萬四
千の法門、五千有餘卷の經論もこの中に攝まれるものなりと謂つべし佛法
は其の眞義に至りては廣大無邊甚深微妙にして其堂奥廣く之を開けば八
萬四千の法門となり五千餘卷の經卷となり十三宗三十六派となるも之を卷
けば懷に満たず南無阿彌陀佛の六字妙法蓮華經の五字乃至一阿字も亦其
要を盡して居る甚しきは默々一字を語らず尙ほ其趣を充分に傳へられるの

である此が卷舒自由殺活も亦自在の所でありまして八萬四千の法門と分け
其數多しと雖

あめあられ雪や氷と隔れど

落れば同じ谷川の水

て塵沙の法門無量の妙義と隔る如くなれども其歸する所は轉迷開悟離苦得
樂の外なく即ち我れくが五欲の塵に蔽はれて實の本心本性が隠れて仕舞
て居るから人には四百四病の煩ひありと云ふが此の五欲の毒は分れて八萬
四千の煩惱となり之れを治するの教亦分れて八萬四千の法門となる即ち吾
々の心の中に無量の煩惱病があるが故に釋迦牟尼佛をして廣大無量の法門
を開かしたる所以であります之を心地の法門と申して吾々の一心を離れ
た教と云ふものは一つもないのでありまして佛法全體が心の講釋をしたや
うなものである故に一切藏經は心の一字の註釋と古人も云ふて居ります然

るに一般佛敎界の有様を見れば各宗派を特にする結果其敎義に於ても亦分るゝ所あるが爲め敎説區々にして却て一般の者をして迷ひを惹起せしむるの傾きあり併し佛法の上より見れば自力の信心他力の本願と分るゝあるも決極同じこととて自分の力で信じ解し行じて行くのが自力で聖道門と云ひ他の力を藉りて佛果を得るのが他力で淨土門と云ひ禪は元來直指人心見性成佛と説き眞言は阿字本不生六大縁起を語つて即身成佛を談じ自力中の大自力を標榜して居る眞宗、淨土、念佛は易行の法門と號して雜修雜行は返つて迷妄の罪を増す唯だ一向專念に彌陀本願力に因つて往生を期すると云つて他力中の大他力を唱道して居る此の二門に分れて居るのは世間道に難易の二つある如く陸路の歩行は即ち苦にして水路の乗船は即ち樂である通り自力の方は自分の力で山を越え川を渡つて涅槃の都に趣くので他力の方は佛の慈悲にすがつて行くので船で行くやうなものです故に又他力を易行道

と云ひ自力を難行道とも云ひまして自力門よりするも他力門よりするも信心の上から見れば少しも變りはない自力門に依つて安心する者の爲には自佛と説き他力門に依つて安心するものゝ爲には他佛と説きたまひしのみ自力の極點に達すれば他力となり他力の極點に達すれば自力となる故に其謂ゆる

自力門では心外無別法

他力門では法外無別心

と云ひ心の外に別法はない法の外に別心はないと其の立脚地は異れども自力も法界を究盡し他力も亦法界を究盡して缺くることなく餘ることなきなり結局自力と云ひ他力と云ふも皆此の眞如界に誘引する手段に外ならず左すれば自力の法門も他力の法門も其實は眞如の明月を標示する指の如きもので阿彌陀と云ふも妙法といふも亦是れ其眞月にあらずして其月を指す指

なることを諒知すれば種々と其宗派に於て異なるも佛法の大海に入り無價の寶珠を得んと欲し又涅槃の高嶺に登りて眞如の明月を眺めんとすれば何れの宗何れの門に入るも同じこととて

わけ登る麓の路は多けれど

同じ高嶺の月を見るかな

て畢竟淨土門と云ふも聖道門といふも釋迦一佛の説法なるがゆゑ其極意に至りては毫末の差異あるにあらず聖道門に因縁ある人は自性天真佛の眞如法性を觀じて正定聚に入るべく淨土門に因縁ある人は阿彌陀佛の眞如法性を觀して正定聚に入るべく只聖淨二門の畢竟一堂に入り坐禪念佛の畢竟眞如の一理に歸することとであります

宇宙眞理

眞如と云ふは宇宙の本體を指したもので本體には生死もなく増減もなく始終もないのであります併しながら其現相には花が咲きたり散たり人が生れ

たり死んだり海の水が満たり干たりして生滅あり始終あり増減あり而も本體は花が散つたと思へば根に來春咲く所の蕾がちやんと含んで居る葉が落ちたと思へば枝の下にはちやんと芽が含んで居る實に本體は不生不滅不増不減無始無終であります此の生滅あり始終あり増減ある之れを萬法と云ふて丁度海水の上に立つ生滅の波は萬法で不生不滅不増不減の水は眞如で此の種々と表面に顯はるゝ花と咲き實と結び波となり引く潮あれば差す潮の寄せては返す白波の其の様々の働きは即ち眞如のあらはれて居るのでこれを眞如即萬法と申しまして是れが宇宙の眞理であります吾々人間は此の眞理の中に包まれて眞理の支配を受けて居りながら宇宙の眞理に味いから之を迷と云い宇宙の眞理に明かなるを悟といふので此の宇宙の眞理を見ると出來ないのでこれを無明の雲が實相の光を隠して居るのであると云ふソコデ若し此の無明の雲を拂つたならばこゝに迷を轉じて悟を開くのであり

八
ますが吾々は唯何の考へもなく朝には衣食の資に追はれ夕には名利の鬼に
驅られ人生の目的も人生の意義も辨へず此の生の由來も知らず死の所去を
も悟らぬのであります

抑も萬象の生滅は宇宙の活動にして生死去來は天地の事實なり金鳥東海に
出づれば頭々光を添へ玉兔西山に没すれば物々色を失ふ而も出るもの始め
にあらず没するもの終にあらず晝夜幾回轉するも乾坤舊に依て一物の増な
く四時幾交代するも覆載依然として一塵の減ずるなし故に謂ふ生死は猶落
葉の如きか春風一たび到れば百花霞に笑ひ秋氣一たび發すれば萬葉枝を辭
す而も天地は未だ曾て一絲毫をも増減ぬせ宇宙もと生死無く大道豈に變易
することあらんや然るを世人之れを呼んで時と云ひ日と云ひ月と云ひ年と
云ひ世紀と云ひ將た生死と云ふ只落紅風の拂ひ盡すを見て庭樹綠陰の生ず
るを知らず千草萬木の落葉するを見れば花は根に芽は枝に早や春の蕾かち

やんとふくらみかけて居るではないか實に此の宇宙は無限の妙用を包容す
る一大秘密藏ではないか三千年の昔し印度に於ける大聖釋迦牟尼佛は此の
秘密藏の鍵鑰を握りて千古不磨の教を開き人生の歸趣を示されたのであり
ます

釋尊一代

釋迦牟尼佛は印度即ち天竺（中天竺）伽毘羅婆薩國と云ふ國に淨飯大王と
云ふ方がありまして其一子として悉達太子と仰せられ一天萬乘の王位を繼
がせられ出づるに車あり居るに金殿玉樓あり口には山海の珍味を味ひ肉體
上には何一つ不自由なき御身分にあらせられ然るに人間の生老病死の苦み
を深く感ぜられ此の世界は苦の世界で吾れ悉達と雖ども此苦は免る事は出
來ぬ我れ是より奮發して一切衆生の苦を抜いて大安樂を得させ様と云ふ大
慈大悲の御心を起されまして出家得道の念深く遂に或夜車匿といふ御者に
命じ龍馬に乗じて夜半に城門を出て先づ檀特山と云ふ山に入つて伽藍仙人

阿藍仙人と云ふやうな仙人に事へて菜を摘み水を汲み雪を凌ぎ風を堪へて
色々艱難辛苦を経させられて十九の御年より三十の御年まで御修行なされ
て十二月八日の夜明けの明星の昇るのを見て豁然として大悟遊されて其の
時の御詞に

有情非情同時成道

と仰せられた有情とは動物のことで非情とは草木の様な情なきものをいふ
ので小蟲魚類より草木にいたるまで皆悉く釋迦牟尼佛と同等であると仰せ
られた然れば吾々は勿論草木國土悉皆釋迦牟尼佛と同じ境界で有るに相違
ない元來佛敎は神を此宇宙の外に立てる基督教のやうなものでなくして一
切の衆生悉有佛性と申して我々も佛と同體の資格を持つて居るのであるが
無始劫來の煩惱の爲に此佛性を味されて迷ひにくく居るのであるから此
迷をだに轉せば直に佛と同じ位に入ることが出来るると云ふので佛と我々と

の違ふところは迷ふと迷はぬとにある迷へば十萬億土と隔たるも悟れば是
心是佛である地獄と云ふも極樂と云ふも穢土と云ひ西方淨土と云ひ何も其
様の世界が別にある譯でなく皆此心一つを説き示した迄にして佛法は只形
の上の經文や文句にばかり有難い處があるのではなく眞に吾々の心に會得
が出来て我々の行住坐臥の上に實地に實が顯れて算盤はじきて商賣する上
にも天秤棒を肩にして八百屋をする上にも鋤鍬持つて耕作する中にも一擧
一動に於て眞實ならざるはなく天道に叶はざるはないと云ふ實の顯はるゝ
處に佛法の有難みがあるのです、ソナルト天秤棒を肩にした八百屋の佛
様も出來魚を賣り歩く佛様も出來鋤鍬持つた佛様も出來算盤持つて帳場に
坐つた阿彌陀様も如來様も出來るのである迷ふと云ふも此の心悟ると云ふ
も此の心此の一念の轉ずる處に依るのである此の心が天地の眞理に違ひた
るのが迷ひて天地の眞理に順ひたるが悟りて故に天地自然の理法を見極め

ると云ふことが佛法の根本の教義である故に釋迦牟尼佛は嘗て末代の吾等に示して言く我が泥沮（涅槃の事遷化の後）の後當に四法に依り止まるべしと所謂四法とは

義に依て語に依らざれ

智に依て識に依らざれ

了義經に依て不了義經

に依らざれ

法に依て人に依らざれ

と佛は已に是の如く教へ玉ひしにも拘はらず語に依て義に依らざるものは其皮相を見て其神骨を見ざるなり伯樂と云へる人は馬の性質を見るに於て最も其妙を得たる人なりしと云ふ其人の馬を見るや必ず其神骨を見て其皮相を見ざるとかや今夫れ佛教を見るに就ても亦伯樂の如くならざるべから

ず良馬は皮相にあらずして神骨にあるべし眞理はその言句にあらずしてその言外にあるべきなり言外の第一義即ち一心の妙理 着眼せざれば以て佛意のある所を知ることとは出来ないであります

釋迦牟尼佛は八萬四千の法門を開いて衆生濟度の方便を盡し玉ふ因彼の印度の靈山に在まし、時其入滅に近くや門弟子等を悉く集め一枝の華を以て説法の高坐に登らせ何事も仰せられず高く其華を右の手に拈じ舉て大衆に示さる大衆何れも忙然として其意を汲めず互に顔を釋尊の方へと注ぎ何ぞ仰せあるかと耳を澄し息を殺して待ち居るけれども一向に何事も仰せられず又大衆の中にも一言口を開く者もない釋尊の方では誰ぞ我が意を會する者があるかとデロリと大衆の方を見詰められてある時に三千の會衆の中で一人一番上座の大迦葉のみが莞爾と笑はれた傳にも金色の頭陀破顔微笑すとある微笑と云ふのであるから大笑せられたのではないほんの莞爾と微笑

一四
笑を漏らされたのであるそれが釋尊の御目に溜つたものと見え是に於て釋尊我意を念じたるものは大迦葉一人のみと言はぬばかりに初めて金口を開かせられ御聲高らかに

吾に正法眼藏涅槃妙心無上の大法あり汝迦葉に付囑す
と言はれて其席を譲らんとせられた詳くは

吾れ清淨の法眼涅槃妙心實相無相微妙の大法を以て汝に付囑す汝當に護持すべし

と斯ふ日はれて更に阿難尊者に向ひ

須らく斷絶せしむる事勿れ

と命ぜられた是れが世に名高き拈華微笑と云ふ事實て是は不説の説法華一本と云ふて心に傳へ又心によりて悟了すると云ふ服從の信仰よりも自證にある自證して信心に入るにある然れば自證とは何んであるかと云へば自は

自己なり證は悟りなり眞實の悟りである故に自ら眞實に悟りて而して後に信心に入り又眞實を極めて眞實に住するにある然らば眞實を極むるには自己を見よ自然を見よ自己の本來を見よ更に花一本の意を解せよと云ふことになる斯く觀じ來て自然界を眺むれば、春風暖を送りて堅氷は茲に解け枯木寒林裡に先づ暗香を添へ來り梅花を初めとして桃櫻の類其美を競ひ百花爛漫として錦繡の如く香風馥郁鳥語婉轉の期も忽ちに過ぎ夏となり秋となり柿栗等の木果が累累落々樹梢を飾り又木葉の黃落するは是れ新陳代謝し新しき萌芽に向つて其位地を讓るものにして這裡の消息大に因果の理法を示すものならずや宇宙の萬象何者か取りて以て我師と爲すに足らざらむ、風雲亦可、流水亦固より可なり一人萬有に對する萬有皆是れ我師たり道は邇く爾の左右に在り奚ぞ之を遠きに求むるを要せむ崔嵬の山洋々の水絲々の柳條片々の梅花悉く是れ眞如法性の顯現實に是れ無文の經卷と云ふべく

所説の妙理滾々として汲めども盡きず洋々として其際涯を知らず故に二宮
尊徳翁の詠まれたるに

音もなく香もなく常に天地は

書かざる經をくりかへしつゝ

とありて縱令千佛萬佛の世に出づるありて各々四辯八音の雄辯を振ふとも
決して之れに損益する所あるを得ず此の天の自然此の宇宙の眞理を會する
に於ては其儘が皆釋迦牟尼佛の説法ならざるはなし故に教の歌に

騒しき峰の嵐や磯の波

これ皆法の御聲なりけり

花は花紅葉はもみぢ其儘に

言はて教ゆる我が法のみち

とありまして一本の華これ自己であるこれ宇宙である是れ森羅萬象である

是れ萬物の教へである一切の教法である斯ふ悟つて見れば其華は無量の感
慨を宿し無數の教訓を具備し千萬の教説に勝る廣長舌である大説法である
と云はざらんや然り其華は萬物の根源である萬物の終りである又萬物の現
體である、一本の華無限無際無量無邊の力を持って一切の意味を傳へてゐる
のである人間生死一切を説明して居るのである華一本是れ釋迦である佛法
である釋尊は生死一如の大覺悟を以て萬有の復活を宣し千載不磨の靈と化
した印度は滅亡したが印度の光明は益々靈光を輝して居る三千年の昔し釋
尊は入滅されたが三千年の今釋尊は存在して無限の説法を宣して居らるゝ
のであります

本編『いろは』の中には斯の如き佛法の極意が含まれてあると云ふこと
を一般の讀者に知り易からしめんとの微意を以て是より本文の釋義に移り
ますから義に依つて語に依られず一讀の間に於て自ら言外の妙旨を領得し

併せて大師の深意を看取せられよ

四十七文字

いろはにほへとちりぬるを
わかよたれろつねならむ
うるのれくやまけふこにて
あさきゆめみしゑひもせす

詠み方

色は匂へど散りぬるを
我が世誰ぞ常ならむ
有爲の奥山今日越えて

いろは本文

四句偈文

浅き夢みじ酔ひもせず

是は弘法大師が涅槃經四句の偈に依り四句の文意を和けてお造りになつたもので四句の文とは

諸行無常 是生滅法

生滅滅已 寂滅爲樂

此の四言四句であります僅か四句の偈なれど此中に甚深微妙の意義が含まれてあります今此の四句に「いろは」を配せば

諸行無常

いろはにほへとちりぬるを

是生滅法

わかよたれろつねならむ

生滅滅已

うるのおくやまけふこえて

寂滅爲樂

あさきゆめみしゑひもせす

此の四句を二段に分ち前の二句を無常の半偈とし有爲有漏の迷の有様を詠みたるものとす後の二句を如意珠の半偈とし無爲無漏の悟の境界を詠みたるものとす

是は衆生の機根に色々あれば四句に分けて其意義を淺より深に説き明したるものにて「止觀に雜阿含」を引て佛比丘に告て曰く四種の馬あり一には鞭の影を見て驚きて御者に隨ひ二には毛に觸れて驚きて御者に隨ひ三には鞭の肉に觸れて後に驚く四には鞭の骨に徹して然して覺ゆと此を經に合す

第一句意

るに初の馬は他の聚落の無常を聞きて即ち厭離をなすが如し、次の馬は己が聚落の無常を聞て能く厭離を生ずが如し後の馬は己が親の無常を聞て即ち能く厭を生ず第四の馬は己が身病苦にして方に能く厭を生すが如し是れ淺深の意義を明す、初の一句を聞きて有爲を厭ひ無爲に住する者あり次の句を聞きて無常を知る者あり三四の句に至りて得道するものあり此の故に四句は僅かなれども妙義廣大にして無邊無量なりといふべし
四句を因と果とに分ち初の二句は因行、次の二句は證果とす
第一の句は諸行無常の句を色は句へど散ぬるをと和らげ春の花が色も美しく殊に好き匂ひを放つて居るア、綺麗な花であると思つて居るうちに夜半の嵐にはらりと散つて仕舞ふ紅顔忽ち變じて草葉の露と化し白髮虚しく野邊の煙となる人の色香も同じ乍ちの間にあはれ果てぬる越を明したるものであります

諸行とは行の字はゆくとか、おこなひとか讀む訓であります。佛敎の解釋にては行とは行動なり遷流なりと申して變々化々して停まらぬこととて近くは吾人の身心を組織せる色、受、想、行、識の五蘊

色とは物質の事で茶碗とか水呑とか云ふ物體即ち形體の眼に見るべきもの佛敎にては此物質のことを、いつも色と名けて居ります。吾々の身體は此物質と精神と集合して人と云ふものが出來て居る色は物質で心は精神でその心を次の受、想、行、識の四つに分けて之れを心法と云ふ

受とは領納の義で丁度受附の様なもの。此色身あれば乃ち眼に一切の色を見耳に一切の聲を聞き鼻に一切の香を嗅ぎ舌に一切の味を嘗め身に一切の觸覺を起して熱いとか冷たいとか軟らかいとか堅いとかを知る、これにつけて彼れ是れと思ふ意がある意につれて法があるソコで眼、耳、鼻、舌、身、意の六根が色、聲、香、味、觸、法の六境に對して感受す

る作用を云ふ

想とは六根が六境に感受したる境界に對して善惡苦樂種々と、よいとか、わるいとか思ふこれを想像の義といふのであります

行とは想像につれて身を動かし意を動かし言語を出し身、口、意の三業が間斷なく行はれます、これを行遷流の義と云ふ

識とは分別するの義で右のことからを一々と知り分けて善惡を識別して一種の決定を與ふのが識であります

遠くは宇宙に森々羅列する日月星辰の運行より風雨の變化雲霞の去來する地の百物を生じ天の萬物を化育し四時の行る、百花の開く草木の實るあらゆる萬有諸法を總括して諸行と云ふのであります。吾々の身體も心の作用も其他の一切萬物が色々の作用を爲して居るのは因縁力によるので此の因縁が離散すれば散滅して變らぬものは何一つもない。然るに一切の衆生は此等

の有爲無常の萬境に心を迷はされ色聲香味觸を緣じて善惡の業種を薰習し顛倒夢想の行ひを爲すが故に六道を廻りて有爲の苦樂を受くるのであります六道有爲の諸行は皆色法なれば諸行の二字を大師は色は匂へどと和釋し顯はされたるなり

無常

無常とは定まる事なきを無常と名ける唐の因明正理論に日本無今有暫有又無故云無常一也とあり是れは五蘊の中の色に依り吾々の身體も萬物も形を顯し我物別々の成形を爲して夫れづの行相行業を成すけれども有爲の法は頓て滅する法なれば無常と説くと云ふことで今此の色法に依る色とは物質の事です色は質礙の義と解釋をする質は物質の事又性質で、もちまへといふこと總て物質には夫々のもちまへを持つて居る土には土のもちまへ、水には水のもちまへ風には風のもちまへがある之を質と云ふ各々もちまへを持つて彼此各相異なるを礙と云ふ礙は障礙など、熟字して他物と相容れざ

るを云ふ例へば此所に机と云ふ品物がある是れは木と云ふ一つの性質がある之を此所に置きますると云ふとそれが即ち空間の一部分を占領して居るから之を他へ移さないといふ他の物は此の位地に來る事が出來ぬ總て物質は何物に依らず其物其物の、もちまへを具へ而して空間の一部分を占領して居るものである故に障子を一枚隔て、居ても向を見る事は出來ぬ即ち彼れと此れとの間に隔てをつけるのが物體の性質であるそれで質礙の義と云ふ佛敎では此物質をいつも色と名けて近くは吾々の身體の事遠くは天地間の萬物を總じて色と云ふのであります故に此色の内には吾々人間も我々の住む所の家も水を呑む所の茶碗も現るゝそこで吾々身體と萬物とが形を現し種々の作用を成すといへども皆因縁によつて出來たもので今日の學問で申しますれば天地萬物は元素と元素との寄り集りによつて出來たもので元素を離れて別にこれと云ふ物はない吾々の身體も地水火風の四つて出來たもの

てこれを離れて別に我と云ふものはない、そこで此身體を四大の假和合といふて此因縁を離れて何もあるべきではない、これを因縁所生の理と申して因とは原因の事で縁とは其原因を助けて結果を生ぜしむるもので天地萬物は此因と縁とに依つて種々の形を現して居るけれども因縁を離れて何一つとして形の現れて居るものはない時かぬ種は生へぬ道理で如何に立派な原因即ち種があつてもこれを時かねば芽も出ねば實も結びませぬ、これを時くと云ふ縁が加はりて、こゝに實を結ぶやうになるのです、これを因縁所生の理と申して我と云ひ物と云ふ實質實體はないものである何れも此因縁離散すれば跡方もなく焼けば灰、埋めば土となり此の有爲の法に支配せらるゝものはつまり滅して仕舞ふ法なれば之を無常と説きたのである此無常に刹那無常と一期無常とありて刹那無常とは刹那の後必ず住せず念々無間にして壞すと云ふので無常の理は一瞬の間も止むことなく前に念ふたこ

と、變り後に念ふたことは其又後に念ふたこと、變りて極く僅かな時間の中でも遷り易りのないことはないと云ふので刹那とは極く少しの時間の事です一期無常とは生じ已て即ち暫く有て還てなしと云ふて人の生れて老寄となり、さて死んで行くのが一期無常と云ふので此諸行の法は其性元より無常無我と云ふて宇宙萬象は時間の上で遷り易り別段我と云ふ常一主宰のものがあるのではないと云ふのであるから何れも散滅する故に無常の二字を大師は散りぬるをと和釋せられたるなり

色とは一切萬物を總稱した名目でありすが大躰に之を三種に分て顯色、形色、表色となす

顯色を開いて青、黄、赤、白、光、影、明、暗、煙、雲、塵、霧、空となす

形色を開いて長、短、方、圓、龜、細、高、下、正、若くは不正なり

表色を開いて取、捨、屈、伸、行、住、坐、臥とす

二八

此三種の色は眼識の見る處にて兼て心識も承知し居る處であります眼は赤
いとか白いとか長いとか短いとか物を取るとか物を捨つるとか此れは善い
とか悪いとか見分け、心の見知る處は白き中には綿か紙か赤き中には花か
紅か我れの氣に順ずる色は善にして愛すべし我の氣に逆ふ色は惡にして嗔
るべしと事に依り理に依り其の品々を見分る作能なれば是れを分別識と名
くるので此を王に譬て心王と名け眼、耳、鼻、舌、身の五つをば臣に譬へ
眼は諸々の色を見て心王に通れば心王は善惡の色を分別し此決斷が誤なく
正眞なれば諸行は善にして安けれども是れを有爲の善と名け若し心王の決
斷踈畧にして色欲に迷著し善き色も我れの氣に逆ふては嗔り惡色と分別す
ること丁度牛羊の目には花の色に驚き犬猿の心には琴の音を厭ふが如く惡
色も己れの氣に順ずれば之れを愛し善色と分別する故に娘蟻蟲（くそむし）

の天の甘露の美なるに酔ひて却て糞穢を好むが如く善惡の見分け不正なれ
ば諸行は惡なり其時は心王位を夫ふて自ら苦を作る是を有爲の惡と名く此
時如來の教を信じて修行すれば情欲を去て分別するが故に善惡の中には善
にして惡か惡にして善か善惡俱に惡か善惡俱に善かと正道に決斷して臣の
五根を己が助とし王臣の功を調和し臣は臣の道を盡し王は王の道を完して
是を心の鏡と云ひ儒道には此位を明德と名け人の天より受け得て心の中に
具はりたる少しも曇りなく天理に自ら叶と云ひ神道には神明と名けて神は
正直の頭に宿ると云ふ世間では心をこゝまで説て居りますが其以上は説て
居りません然るに佛道にては此位を未だ眞實の心とは名けず有爲の善行と
して六識の了知する色の分濟と云ふのである今此の『いろは』と云ふた色
は美麗嚴好にして順情可愛の色を擧げて人間の形色一切の色を顯すこととて
ある

二九

句ふと云ふは旃檀沈水飲食の香薫でありて鼻識が受取る處なり今此句ふと
 云ふは色が盛であることを云ふべき爲て花も人も盛りの最中には句があれ
 ども盛過ぎては句ひも失せて愛着する者もなくなりて仕舞ふ此の句には善
 き句もあれば悪しき句もあるが世には句といへば美香なりと知り臭と云へ
 ば悪香なりと局りて云ふのであるが元來麝く者の性によりて美惡定まるも
 ので其自性のなきものなれば人間の美香とするものも天上界では臭き句と
 麝くことがある昔し優陀美王と云ふ王様が居られたが至りて聰明なる御方
 でまた美はしき香があつた其夫人を有相と名けて容貌が端正であつた雙べ
 られるものがない其故に王様は深く愛でさせられ自ら琴を取りて彈じ夫人
 には立ちて舞れた所が此王様は大變人相を見らるゝことが上手であつたが
 夫人が立ちて舞はれんとして手を擧げた時はや死相が見へて居た此は大變
 はや餘命も唯七日と縮りてある、そこで王は琴を捨て、嘆息せられた其時

夫人の云はるゝには王の恩愛を受くる故に自ら立て舞ふに大王には歡樂い
 たさるべきに何とて此く歎げき給ふぞと申上げたれば爾時王云々なりと語
 り玉ふ夫人聞いて憂いて曰く我聞くに信心あり一日出家すれば必ず天上に
 生ず我出家すべし願くは許し給へと王の云く汝に片時も離れがたし六日の
 後に出家を許すべしと終に六日過ぎて王の言く汝善心を以て出家を求めば
 必ず天上に生ずべし天上は至りて自在なる境界なれば天上の後も來りて我
 に見へよと誓ひ已りて出家を許された、そこで夫人は出家をせられて八齋
 戒を受け其日に即ち命終をせられたが善縁がありたものであるから天上に
 生じた併し本誓を憶ふて王の所に至り光明を以て普ねく王宮を照された王
 問ふて汝は是れ誰れぞと申されたれば我は有相なりと答た王は此の言葉を
 聞て喜ばれ此に來りて坐し給へと申されたが有相夫人が答へらるゝには我
 今來るは昔の誓のあるあればなり王を見るに臭穢にして近き難しと大王は

此言葉を聞かれたが廓然として心開て歎いて云るゝには其許は本は、わが夫人でありた然るに一日出家して天上に生じ神志高遠になりて我を鄙賤すいざや我も出家すべしとて位を捨て出家せられた此は有相夫人の色香盛なれども滅し王の色香善なれども天上のものは鄙賤す天人の色香も如來の色香に及ばず好き色香なりとも執着すれば悪香となる善縁逆縁さだまる性なければ愛するものゝ心によることである昔し平の清盛と申す人は大層に驕を極めました但其頃京都に妓王妓女と云ふ美しい白拍子が居りまして姉の妓王はとりわけ姿も美しく藝もよいといふので清盛の寵愛を受けて西八條の邸に抱へられて居ました然るに加賀國より又一人の白拍子が上つて來ましたその名を佛御前と申して年も若く今様の歌から舞の手迄妓王より一層よいと申すので京洛中の大評判でありましたが一日西八條の邸に行きて清盛に遇ふと致しました然るに清盛は妓王のあるに誰れが來ようとも用事はな

佛御前

いと叱りつけて追ひ出さふとしたを妓王が止めて其様に仰せ玉はずとも何か一曲奏てさせ玉へと申したら然らばとて佛御前を通して一曲を弾かせて今様を歌はせられたところが頗る美人にて目細鼻高櫻色唇は丹果の如く齒は雪を欺き腰は百連の絲を束ねたるが如くにして芙蓉も嫉むの風情立てば芍薬坐れば牡丹歩む姿は百合の花で器量と云ひ音聲と云ひ其色香には清盛も遂に心が移り妓王の色香もたちまちさめ御暇が出ました妓王もさて情ない仕合とは思ひましたなれども詮方なく其意を歌によせて障子に

萌え出づるも枯るゝも同じ野邊の草

いづれかあきに遇はて果つべき

と云ふ一首書きのこして引きとり餘り哀しさに死なんと思ひましたなれども母の切なる諫により思ひ留つて居る内に清盛の許より佛御前の徒然を慰むる爲めに邸に來て今様なりとも歌へよとの命がありまして妓王は止むな

く屠所の歩みで邸に参りましたればこちらへと奥の間にも通されること
 思ひの外遙か下の方に座らせられて佛御前とは同席もならぬ悔しさに胸
 もはりさける思ひをちつと押へて早く歌へくとの言葉に

佛も昔は凡夫なり我等も遂には佛なり同じ佛性具する身を隔つるのみぞ
 悲しけれ

と今様を歌ひましたれば満座の人々袖をしぼらぬものは無かつたと申ます
 妓王は斯くてあらば此の後如何なる憂目に遇ふも知れぬと覺悟を定め妹の
 妓女と母と三人一所に黒髪を截つて尼となり嵯峨野の奥に引き籠り草の庵
 を結んで念佛三昧に日を送つて居りましたが佛御前も妓王が障子に書き置
 いた『いづれかあきに遇はて果つべき』といふ歌や先の今様などを思ひあ
 はして自分の身も何時かは妓王のやうに追ひ出さるゝに相違ないと心がつ
 き其年の秋の暮に窃に邸を逃げて嵯峨野なる妓王の庵を訪ね行き心のうち

を打ち明けて四人一處に念佛三昧の身となり往生を遂げたと云ふ話しがあ
 りますが色香のさめ易きをさとさんが爲め色は匂へどと云ふなり

散ぬるをとは消散壞滅の義にして無常のことである之を涅槃經には一切諸
 の世間に生ずる者は皆死に歸す壽命は無量なりと雖必ず終盡あり夫れ盛な
 る者は必ず衰へあり會合する者は離別あり壯年久しく停まらず盛色病に侵
 さるゝとあり有爲の法は無常なれば如來の御身と雖も機縁つきては入滅を
 いたさるゝ況や器界及び衆生は暫時の間である水流れて常にみえず火盛に
 して久しくもえず日出ては須臾に没す月満ては又缺く然るを人は無常の形
 をもて長壽と思ふて惡業を作り無常の死をかへりみず通力の仙人なりとも
 死をのがるゝものはなし昔し兄弟四人あり作業を捨て山に居す五神通を得
 て皆仙人と名く各々その壽命の盡ることを知て種々の思案をした我等は神
 通自在に飛び騰り、みづから恣まゝなれども今無常の爲に身命を失ふこと

三六
は患難なれば何とか方便をして死を避けんとて一人は即ち空中にありて形を藏くさば無常の對、如何で我を知らんと云ひ一人は即ち市中の鬮はしき處にてまじはり居らば廣大無量の中に我一人を無常の對、如何で我を求めんやと云ひ一人は即ち退きて大海三百六萬里に入りて底に至らず表に至らず其中程に居らば無常の對、如何で我を知らんやと云ひ一人は即ち密かに大山の人なき處に至り山を攀いて中に入り還つて合せ居らば非常の對、如何で我居る處を知らんやと云ふ、かくて爾時に四人各々命を避くるに終に脱ることなく藏れて空中にあるものは自ら地に落ちた恰も果の熟して自ら落るが如く山中に居るものは彼が喪び已りて禽獸にくらはれ大海の中にあるものは魚鼈に食せられ市中に入るものは衆人の中に自ら終りたり此四人の者は死を逃れず皆散滅してしまつた世間の花盛は美麗なれども無常の風來れば色も匂も空しく馬蹄の塵となり愛すべき順境もなくなつてしまふ

春陽駘蕩百花爛漫として錦繡の如く香風馥郁鳥語婉轉の一刻千金の好時節も花時多風雨の諺に漏れず天地の樂園も

世の中は三日見ぬ間の櫻かな

三日どころではない一日の間にも一時の間にも變化を來し、人も青春の時代には最も生氣あり最も艷麗に亦最も旺盛にして愛すべき色香なれども病老の爲に色香を失ふ朝の紅顔夕の白骨て古人の歌に

明日ありと思ふ心のあだ櫻

よはに嵐のふかぬものかは

とある如く無常の風は暫くも止まらず縦ひ奇麗な花を見ても無常のしらせ老少不定何時冥途に旅立せなければならぬかも知れぬ眞宗の蓮如上人が白骨の御文章に

夫れ人間の浮生なる相をつらく、觀ずるに凡はかなきものは此世の始中

終まほろしの如くなる一期なりされば未だ萬歳の人身を受けたりと云ふ事をきかず一生すぎやすし今に至りて誰れか百年の形體をたもつべきや我やさき人やさき今日とも知らず翌とも知らず後れ先だつ人はもとのしづく末の露よりもしげしと云へりされば朝には紅顔ありて夕には白骨となれる身なり已に無常の風きたりぬれば即ちふたつの眼たちまちにとぢ一つの息永くたえぬれば紅顔むなしく變じて桃李のよそほひをうしなひぬる時は六親眷屬あつまりて歎き悲しめども更にその甲斐あるべからずさてしもあるべき事ならねばとて野外に送りて夜半の煙となしはてぬれば只白骨のみぞのこれりあはれといふも中々をろかなりされば人間の果なき事は老少不定のさかひなれば誰れの人も早後生の一大事を心にかけて阿彌陀佛を深くたのみまいらせて念佛まうすべきものなりあなかしこ

かくありまして智者も愚人も貴きも賤しきも天命宿業に打勝つことは出来ませぬ皆此の無常を免るゝを得ざるのである其故に三教指歸には埃を飄へす脆き體も機散の朝には春花と共に繽紛たり風に翔る假の命は縁離の夕には秋の葉と共にして紛紜たりとありまして眞に國土堅しと雖壞劫の夕には散滅しその餘の有爲は皆壞滅するのである三界安きことなく國に何の樂かあらむ此等の教を聞て常に心に掛けて花の散るを見ても己身の無常を知り詩歌に心をよせ落花を吝みこれを菩提の縁と爲して佛道修行の爲に花を詠むべきことである然るに今時は花を詠むる實義を知らず月見花見を遊興の手立とし身に錦繡をまとひ面に紅粉を施して人を伴ひ酒色を好み舞曲に耽りて終日邪見を起す口には花の散るを吝むものゝ手には花を折りて強勢にして更に無常を觀ずることなく還つて花を惡業の種と成す事甚だ悲嘆の至極であるから之を説きさとす爲尙體を出し第二句に於て御示しになりたる

ものなり

四〇

第二句意

第二句は是生滅法をわかよたれそつねならむと和釋せられて天地間のあらゆる萬物は皆無常にして是れ生滅の法なれば我身を始め誰人か常住のものあらん人生百に満たず長命の人でも百歳の壽命を持つと云ふことは甚だ少ない七十歳を古稀と云ふて古來稀なりとも云ひ來り人生僅か五十計と平均相場も立てゝありますが近頃は百歳とか百二十五歳とか云ふ人の定命に關する新説もあります、よし百二十五歳の壽命を保つたとて此の限りなき世界の上から見ればほんの一瞬時に過ぎぬ寒來暑往暑ひくと云ふて居るうちにはや打つて變つて寒天地綿入の重着をして今度は寒いくくと云ふ様になる是れ生じたり滅したりする法にて一切の事物盡く生滅變遷の法であるから常に住つて居るものは何一つもない生あれば死ありて生あるものは必ず滅するの法に支配されぬものはない昔し一休和尚が小僧の時分は周建

と云ふ名で九歳か十歳位の時或日師匠の外出して留守であつた、すると方丈の間へ往て弟子仲間て秘藏の茶碗を壊したので大心配をして居る處が一休は小僧の時代から才士であつたと見え其時茶碗壞しの名代は此の周建が勤めることにしようと平氣な顔で壞れた茶碗を手拭の様な物に包んで袂に入れ再び本堂へ行き遊んで居る、間もなく師匠さんが御歸りと云ふので周建早速頭を下げてお早う御歸りで御座いますと申し上げると小僧又例によつて惡戯をして居つたな「いや今日は何も致しません一心に坐禪工夫をして居りました一つの難問題を工夫して居ましたそれは凡そ人間が此世に生れて來て何れも皆死ぬるものであるが中には死なぬ者もあるであらうか是れ如何といふ事を工夫しました」「馬鹿な事を工夫したものだ生れたものに死なない者は一人も無い設ひお釋迦様のやうなお方でも八十歳を一期として涅槃に入らせられたではないか如何な英雄豪傑でも生れた者は必ず

四一

死ぬる事は古今を通じて變りはない」「それでは生れた者は皆死する者なりと分りましたが私もモウ一つ工夫した問題があります凡そ人間の手で作つた程の物は必ず壊はれるものであらうかならうか」「師匠は笑ひ乍ら人の手で拵へた程の物は必ず壊れるに極つて居る」「然らばお師匠さん極大切な品物でも壊れぬ様に永久に保存されますか」「何程大切な品物でも時節因縁と云ふものがあるから壊れる時分には壊れる時節因縁と云ふものは人力の及ばぬものぢや」「然らば生れた者は必ず死ぬる、拵へた物は必ず壊れると云ふが世の中の相場ですな」「夫れは天地の道理と云ふものだ是ればかりは王侯相將と雖も致し方はない」「天地自然の道理として見ると死んだからとて之を諦めて心を動かさず壊れたからと云ふても時節因縁と觀念して腹も立てぬと云ふ之れが悟りと云ふものでありませうか」「まづそんなものだ」「實は斯くの通り時節因縁が到來致しましたと袂の中から壊れた茶碗を出

した師匠も驚いた此小僧め後世恐るべきだと云はれたと云ふ話があるがどんな大切な物でも生滅の道理は免かれぬから弘法大師は我が世誰ぞ常ならむと仰せられたのであります

是生滅法とは先づ是と云ふは上の句を押へる言葉なれば是れと云ふて上の諸行無常の句を受けてこれ生滅の法なりと説かれたるは上の句は有爲の業行を爲し色欲に着するものに諸行無常と示されたから有爲の着相は生あれば苦あり滅しては着すべきの色欲もなく有爲を離れて無爲圓寂の樂みあるべしと種々の事を邪推する衆生のために此句を説いて是れ生も滅も共に有爲にして常住の法にあらずと云ふ義を是生滅法と教へられたるなり之によりて唯識論には因縁和合して生じ因縁離散して滅すとありまして是れ有爲の造作を述べ玉ひたるもので此の生滅と云ふことは上の無常の句の中にきこゆれども生滅の法なるが故に諸行無常なる所以なりとの意にして今は上

の句を受けて直に體を出し其義を顯はし生は無にして而も有を生と云ひ滅は有にして而も無を滅と云ふ生は新しき諸根を生するなり死は古き諸根の滅なりともありて生住異滅の四相を畧して生滅と云ふたので凡そ宇宙間にありとあらゆるもの、免るゝことの出来ぬ相で、人も生れたのは生で、其成長した形は住、それから年寄つて行くのが異、さてしまいの死ぬるのが滅、これを草木の上で申しますれば春に芽を出すのは生、さて葉も出来花も咲て行くのが住、それから葉の枯れて来るようになるのが異で、それから終に枯れて仕舞ふのが滅で、此地球も同じく此四相の變遷を経ぬものはない生住異滅は春夏秋冬の如く春過ぎ夏來りさて秋となり冬となるそれで一年は濟んだが又翌年には春夏秋冬があり生住異滅、生住異滅と變つて行きつゝ其際限するところがない我等三世に流轉すれば假に生滅の法があるものだから我世誰ぞ常ならむと和釋せられたのであります

我世誰ぞ常ならむ此のわがと云ふは我身のことであるこの我は五蘊の和合物即ち色心二法に依りて身心と云ふ假に我體をなして居る迄にて五蘊各々の法體なれば實我と云ふものはない此の體は有情の依身これ即ち人我法我の著心の上から假に我と名くるものなるに凡夫は常住の我が體ありと思ふて迷ふことは譬へば手拳の如く手を握ればこぶしありされど手を開けば拳の名はなき如く若し五蘊を集めて我とするを實我と云ふ時は手を開いて後も尙こぶしと云ふ名のなければならぬ道理である此の身體は焼けば灰、埋れば土となるものを何處に我と云ふものがあるぞ只これは因縁の和合によつてかゝる身體を現じて居るに過ぎないこれ人の身體ばかりではない天地萬物皆然りである依て吾々は煩惱ある故に我れが我れがと迷ひを起し寢ても起ても此の假の體の爲に無限の欲を懷き金錢財寶に目もくらみ名利に汲々として無常の體なることを覺らざる故に我と云ふ假のものに執着す

るから我と彼との區別の墻壁が出来我の欲を充てんが爲他を押し除けると云ふ我見即ち邪見が起る此の邪見は煩惱の根本である故に

我と云ふ小さきものを捨て、見よ三千世界に障るものなし

とある實に此の我と云ふは迷の根であるから之を離れることが肝要である其我見を離れたる處を無我の境と云ふ釋尊は法界平等平等大悲と仰せられてある三千大千世界の中にありとあらゆる者は悉く平等であるといふ意味である斯の如く私を捨て、天地と我と同體同根と云ふ様になりければ自他の區別に垣根を設けぬから我が可愛い彼れが悪いと云ふことなく孔子の所謂博愛一視同仁であるのであります

己れの欲せざる所これを人に及ぼすなかれ

然るに我れが我れがと此身に迷ふ所以のものは成る程此の體は手もあり足もあり眼もあれば鼻もある四肢五體の總合體で事實上儘に現在して居るに

は相違ないから必畢此の身に執着するのだが佛教の上から此の身體の根源實性を穿索して見ると皆空といふ處に歸着するから古人の歌にも

櫻木を打ちわり見れば何もなし

花のたねとは何を云ふらむ

年々歳々美しく咲き亂れる櫻の木を寸々に打割つて見てもこれぞ花の種と覺しき物は更にな

さくら木をくだきて見れば花もなし

花をば春のそらぞちくる

とある如く因縁集合のものにて是れが天地萬象の實相である

世の中に我が物とは無かりけり

身さへ土にかへすべければ

と古人も云ふて居る吾々の身は我が物と思へばこそ此身を可愛がつて居る

けれども死んでしまへば焼けば灰、埋めば土となる即ち空より出て、空に歸るのであるとすれば此の體は有りの儘が有りつぶれてあると云ふべきであります、それですから色即ち是れ空と云ふので此の身を分析して見ると其自性は元來空ぢや、して見れば分析をしないで其儘空であると云はねばならぬ此理が解れば自然に無我の境界に達せらるゝのである之を吾々は煩惱ある故に實我と云ふ

世とは三世界である凡夫は三世を銅鐵の器物を並ぶる如く常住にありと思ふて無常であることを知らず釋論の中に過去の諸法は有れども後はなし譬へば彼の夢の熟眠の時は有れども已に乃覺悟の時は有ることなきが如し現在の諸法は古は無けれども今は有り譬へば電光の即時に便ち滅して久しく停むること能はざるが如し未來の諸法は自性有ること無く而も忽然として至る譬へば浮雲の有所を知らずして而も忽然と起して十方に遍するが如し

と此れ三世は無常なれども衆生の煩惱によりて有爲世界を變し出してその中に住して居つて樂と思ひ名譽官祿金銀財寶をもとめて皆五欲を増長させて居る此の五欲を去りて眞の本心本性の上より世間の事物を思惟すれば有爲世界を轉じて時間的に動かぬ處の悟りの境界なる無爲に入りやすいです涅槃經に個様なることを云ふてある之を分り易く述べれば賓頭盧王に語りて云ふ大王よく觀察すべし何ぞ五欲あり常を得るものあらむ何ぞ王位ありて而も久しく停ることあらむ何ぞ國界ありて而も遷滅せざることあらむ何ぞ珍寶ありて而も散失せざることあらむ乃至一切の五欲は體性も實に苦なり皆妄想にしたがつて而も樂を生ず故に王位もまた苦にして安きことなしと實に此の世界はあてにならぬ先年亡くなられた岩崎彌之助と云ふ人は誰れ知らぬものなき一代の富豪でありましたが一時身體の悪かつた時大隈伯が邸園を造つて園藝を樂んだなら身體の爲に宜しかろうと勧められた事が

五〇
あるとやらで高輪に五萬坪もある大きな邸園を造つて別邸も建て其内に病
氣が益々重りて折角造つた別邸に入らぬうちに萬一の事でもありては遺憾
である云ふので未だ全部の落成を告げぬ中に引移られたが重態であつて
寢臺の上に寝たまゝ夫程大きな邸園に一足も踏み出さずに無常の風誘ひ來
て彼の世の人となられたと云ふ事である世の中は貪ぢや有徳ぢや苦ぢや樂
ぢや何ぢやかぢやとて未はむちやくちやで、あれ程の財産家でも

思ふこと一つかなへばまた二つ三つ四つ五つ六つかしの世や

縦ひ如何なる金銀財寶に餘りある身分と雖總ての點に於て思ふ様にならぬ
が浮世の習ひとて此の有爲の義を世とは云ふのであります

たれそ即ち誰とは何と云ふことで誰何とて詰り問ふ義である今無明無常の
上の我身、世間を誰と云ふ但し誰の一字は其意が上下に通ずるので『略註』
などには『若し具に言はゞ我誰か常ならむ。世誰れか常ならむ』と申して

あります

つねならむとは不常とかいて不の字をならむと讀むのである常の一字は
我心中の本來の面目即ち本來の佛をさして常と云ふこの佛と云ふは全體ど
ういふ譯であるかと申すに佛敎で佛と云ふと世間幾多の人が誤解して死ん
だ者を佛と云ふ義に心得て居るがそんな譯ではない之れは印度の語で佛陀
と申して漢譯すれば智者又は覺者と申して一切の事知らずといふことなく
悟らずと云ふことなき迷夢の覺めた姿で天地の眞理明皎々たる所をいふた
ので古歌に

はちす葉の濁りに染まぬつゆの身は

たゞそのまゝの眞如實相

とある通り柳は緑花は紅と其儘少しもかはらぬ本來のすがたそれが佛であ
りまして、此の佛は堅固不壞にして宇宙眞理の現れにて古今を通じ萬古に

五二
涉りて變りのない即ち本性を指して常と云ふ、義にて、今示す所の有爲は煩惱の所變でありて常なるものではない、なぜなれば朝には紅顔に笑を含みて世路に誇り夕には青瘀に苦を受けて迷途におもむく其時は錢金をもつて贖ふことも出來ず勢をもつても留むることも出來ず貴賤の嫌なく皆山野に捨て去られる然れば蘭友も止めず妻子も隨ふことなく徒に烏鵲狐狼の餌食となり或は日に暴し青爛して臭くなれば此身を誰も愛することがない世誰か我誰か色身を長く留むるものあるや爾るを常住と思ひ色欲を起し煩惱の結業にしばらく、事は蠶の糸を結んで己れと其中に死するに似て居る此の煩惱の糸をほどけば佛なり此位を解脱と云ふのである、さて煩惱の惡境も多ひが其中で色欲が第一である三毒の起るも凡俗は此の色欲を本として居るのです其故は姪女の色香を見ては己が妻女を思ひ切り振り離しても財寶を費し夜となく晝となく飽かず迷着し他のあざけりも顧みざれば刀に密を

塗りたるものを舐るに只其一應の甘きを貪れば遂に舌をやぶるが如く此を貪欲の煩惱と云ふ其の時親族のもの共が嘆いて教化をすれば還りて讐となり忿怒を發すは瞋恚の煩惱ですまた彼の姪女は財寶を奪はんが爲に深くすれども後來着者の滅亡に及ぶ時も助力とはならず還りて誹謗をするものぢや己れが妻女と定むるものは夫の苦に替り又は奴婢となり頼みあるものなるに之を捨つるは姪女の顔に勝る善き色がないと思ふからて此の顛倒の煩惱を愚痴とは云ふなり亂女の本夫を思ひかゆるもまた此の如くである之れに依り嵯峨天皇の後に橘氏ありき、こは大政大臣正一位清友の女であつた其容貌は、いと麗はしかつたが仁明帝を産み玉ひて後に崩ずるに及んで仰せらるゝには我れに葬儀を用ゆることなかれ中野に棄よ色欲に耽けるもの我が爛穢を見れば少しは驚悟することあらんと云ふことでありたから遂にその仰せの如く屍を西郊に捨てたとあるさて色欲は惡きものと知り苦は多く

樂は少きものと知りても人間の志性に定りなければ惡境にふれ迷着するものあり此時は佛法に歸依し法を聞いて信ずれば色欲も薄くなり三毒の火も力なく善根には移り易し是を以て付法藏經に佛の教て言く一切衆生三界生死の大海を出でんと欲せば必ず法船を假りて度脱せよ法は清涼たり煩惱の熱を除く法は是れ妙藥なり結病を愈す法は衆生の善知識なり大利益をなす」と一切衆生は志性定りなく染習する所に隨ふなり善に近けば即ち善になり惡に近けば即ち惡になり花氏國の王に一の白象が居りて能く怨敵を滅した若し人罪を犯した時には象が來てふみ殺す後に火難の爲に象を移して寺の近傍に置いた比丘が法句經の偈を誦するを聞たその偈とは善を爲せば天に生す惡を爲せば淵に入ると云ふことであつた、そこで此象が其法を聞いてそれから後は心が便ち柔和になり慈悲を起す様になりた、それから罪人を見てもたゞ鼻をもて嗅ぎ舌にて舐る丈で殺すことをせない王はそれを見玉

ひて諸臣を召して此事を謀らしむるに智臣の白さく此象寺に近くなれば必ず妙法を聞いてそれが爲め柔和に成りたるのであるから今より屠肆の處に移して繋ぐべきであると申されたれば王その言を用ひて象を屠殺の所へ繋ぐ惡心猛熾にして殘害が更に増倍したと云ふ是を以て知るに一切衆生の志性定まる事なき畜生尙然り況んや人も染習せば此の如し佛法の巧徳深ければ自然と性を善心に定むるものなり然るに吾々凡夫の心は貪瞋痴の三毒で充たされて居るから凡夫の妄想分別は丸で三毒の範圍を出でませぬ惡と云ふは無論三毒善と云ふも三毒の範圍を出でませぬ三界と云ふも三毒の事である六道と云ふも三毒の事である三毒の強きものを三惡道とし三毒の弱きものを三善道と名けたものです善心の生ずる時は暫く惡心が滅し惡心の生ずる時は暫く善心が滅します善心が滅しては惡心が生じ惡心が生じては善心が滅する是の如く前滅後生して止まぬが無常の諸行であるゆゑ是れ生滅

の法なりと示し下されたのであります

第三句の生滅滅已の句をうゐのおくやまけふこえてと詠ぜられたるは吾々凡夫の心の定まらぬこと丁度大海の上に立つ波風の寄せては返し返しては前滅後生と滅したと思へば生じ生じたと思へば滅する如く順縁とお氣に召した時には直にニコ／＼となり逆境とお氣に召さぬ時には乍ち赫と腹が立ち又鹽梅よく機嫌を取られると何時の間にかニコ／＼然となる何が瞋たのやら何が笑つたのやら其根本を尋ねれば一團の無明であるそれが三毒の煩惱となるこの三毒が厚薄に分れて善惡となるこの善惡が六道となり三界となるこの三界六道が凡夫の住處この無明三毒が凡夫の心であるこの凡心は何が根本となるのであるかと云へば只一口に之を「我」と云ふのである此の我も畢竟空なるものであると了達するのが即ち無我の一念である此の一念は正念と云ふのであるが心の内に煩惱の浮沈があるから念起念滅と

て紛々たる心の波風即ち心の生死がある生死即ち生滅は一切のものゝ上行はれるので生者必滅會者定離老少は不定にして富貴は夢の如く五欲の歡樂も暫時の夢、如何に偕老同穴を契りし夫妻の間も當にはならず如何に百年の齡ひを誓ひし親子の間も頓に死別の悲みに逢はねばならぬ、孜孜汲々として蓄へ積みし財産も未來まで持越す譯にも行かず財あれば有つて心を惱まし無ければ無いで亦心を苦しめ富貴も頼みにならず花の詠めも同じ無常なればさて此の身命も頼みにならず古人も人間の一生の有様を述べて盟より盟に移る五十年と云はれてあるが生れ出ると直ぐ盟の中で産湯つかはせる夫れから死に向ひて五十年の間時計の針がかち／＼と進むにつれて一日／＼と其命數を縮めて行き結極五十年経つた所で此世の縁が盡き今度は盟で湯棺をつかはせて、それで人間生れてより死ぬまでの手續であると云ふこととて老少定めなく我が世は誰ぞ常ならむと仰せられた然るに生死の實

相に闇き爲め煩惱妄想を起し此の身に執着し見聞覺知に礙へられて種々の顛倒を生ずる此の顛倒せる迷界はうゐのおくやまで妄想分別が、はびこりて難中の難と云ふ三毒（貪瞋痴）の中にさまようて居るのであるから容易に之を越されない三世の諸佛歴代の高僧がその高貴を捨て妻子を棄て世の名利榮辱を省みず出家學道して山に引籠り樹下石上なぞに多年の端坐ましまして御修業なされたも皆此の生死の迷ひを解脱し此の人生の苦惱を脱し一切の迷執を離れ心界に安樂を得んが爲め又世人をして心界の安樂を得せしめんとの大慈悲心に外ならぬ斯くして吾々の心の安樂を得せしめんとの教範を布かれたる佛法教化の巧徳に依り生死の迷ひを去り三毒の心を降伏させ三毒の力が盡き妄想心の働きが無くなつて少しも心が迷はぬ心が動ぜぬと云ふ境界になつたのが生死即ち生滅の心法が滅し已つたので此の心的状態を今日越えてと云ふのであります

生滅

釋尊雪山の菩薩行

生滅滅已さて此の生滅滅已と次の寂滅爲樂の句は菩薩の全身を捨て玉ひたる佛果の秘文である佛が過去の世に婆羅門となりて雪山の中に行を修し玉ひた其の時は佛もなく亦は經法もなかりた天帝釋、菩薩の獨り山中に苦行を修するを見て即ち下りて試みにその身を變じて羅刹の像となり菩薩の前に住して口に半偈を説く『諸行無常、是生滅法』之なり菩薩この半偈を聞きて心に歡喜を生じ坐より起つて四方を顧視するに餘人なし唯羅刹を見て即ち問ふ大士は何れの所に此の半偈を得たるぞ此の偈は三世諸佛の正道ならずやと羅刹答て曰く汝問ふべからず我は食をせず多日を送る所々に食を求むれども得ずして飢渴苦惱して心亂れて誤りて語す我本心にあらじと、菩薩又語るに我ために此の偈を説きはらば我汝が弟子と成るべしと、羅刹答て曰く我汝が爲に説きたし今飢に責められて力なし菩薩又語る汝何の食をするぞと羅刹答て言く我食するは人の暖肉なり飲に人の熱血なりと

六〇
菩薩聞いて曰く但よく具足して是半偈を説き終らば我身を以て施し供養せんと羅刹答て言く八字の爲めに愛身をすてん事信ずべからずと菩薩答て曰く我今證す梵釋、四天王、諸佛菩薩、我爲めに證したまへと、羅刹之を聞きて説くことを許す、菩薩歡喜して衣を脱て法坐として曰く和上願くは坐して我ために説き玉へと、羅刹即ち『生滅滅已、寂滅爲樂』と是偈を説き已りて菩薩は深思せられ然して後ち所々の石壁道樹に此偈を書き寫し高樹に上りて身を投げて下る其時虚空の中に種々の聲を出して救護し地にとさず羅刹還つて釋身となり菩薩を接取し平地に置いて懺悔し辭謝せられた半偈の爲に身を捨る因縁により十二劫を越えて無上道を成ずることを經文中に説せられてある命を捨て、も得ねばならぬ大切なる偈をむざとと考へてはならぬ、さて生滅と云ふは上の生滅の句を承けて下の文の滅已の句を發するなり上の生滅と云ふは生死のことを顯す一切有爲の法には皆生滅

がありて有情の生死に限るに非ず生滅に三類あり一者刹那生滅二者分位生滅三者一期生滅なり刹那生滅といふは諸の有爲の法は纔かに生ずる時は滅し纔に滅する時は生じ更に中間のなきことが恰も旋火輪の相續して間斷なき如くである是の如く刹那々に生滅して自性常住の法にあらざり三世遷流して轉變無常である分位生滅と云ふは刹那生滅の有爲の法が相續し畢りて間斷する分位の時に至りた位である刹那相續して住する分限を生と名け間斷する時を滅と名く此生滅は色心の諸法及器界等の法に於て皆あるのである一期生滅と云ふは有情の身命相續する時分に約して論ずるので身命が刹那々に相續し存する時分を生と名け死去する時分を滅と名く是れ即ち有爲の根元無明の作能である一切衆生は此の無明を越えがたき故に奥山の嶮岨に喩へて生滅の句を有爲の奥山と和釋せられたのです
滅已と云ふは無明煩惱の滅し已るので初の句にて有爲は是れ生滅の法との

み示して生滅を斷ずる因行の分濟なれば生滅は斷ずべきの法である今この滅已の句は眞の實相を覺れば根本の無明は自ら消滅し煩惱即菩提で斷ずべきの煩惱もなく解脱すべきの生死もなければ一切迷ひの種盡きて闇黒より眞晝間に此岸より彼岸の岸に嶮岨の坂も漸々越えたと云ふので滅已の句を今日越えてと和釋せられたのです

うゝのとは即ち有爲でなすことありと讀む「百法問答鈔」に四縁に爲作せられて生ずる故に有爲と名く既に他の四縁により起る故に亦は依他起とも名く依他の有爲法は因果轉變して凝然に非ず三世遷り躰無常なり生滅無常なりとあり諸行無常の有様で時間的に變化して行くを指し迷の境界を云ふたので此れを有爲法の相となす

おくやまとは有爲世界の越えがたきを奥山と云ふたもので此深山は草木茂り桂羅はびこり道路をふさいで智光を障ふる所なれば最も闇く其中には猛

獸多く集まりて毒蟲も恣まに住せり此の山高ければ人更に越がたく其峯堅ければ誰も輒く崩すことなしと云ふて煩惱妄想の樹木が立茂りて東西南北の道路も更に見當らず一步も正しき道に分け出ることの出来ない五濁の邪林にて惡賊邪思の寄る處智光の絶えて晝も眞闇き無明煩惱のさまを喻へたものであります

けふこえてとは迷ては昨日までは有爲の苦行を成すと雖も悟りて今日は奥山の嶮難惡道を越えて無爲常住の樂岸に至る義である恭なくも善巧方便の教化に依り奥山の通路を習ひ修行すれば無明の妄執を晴れて智光を増長し實相眞如の日輪は生死長夜の闇を照し本有常住の月輪は無明煩惱の雲を拂ひ輸く有爲の奥山を越えて眞如無相の悟を開き不生不滅の法に住し心寂靜にして三世の相を離れ一味平等なれば彼此の隔歴更になく有爲の世界にありながら無明の昏夜は般若の惠日と現じ一心無相の實所に至るのであります

して此眞如無相の理を悟り心を寂靜にし有爲の妄想を離れ眞如法性の理を顯現するを今日越えてとは云ふなり

さて此の眞如とは宇宙の本體を指し眞とは眞實にして虚妄にあらざるを顯す如とは如常にして變易なきを表すと云ふて柳は緑花は紅鳥はカア〜雀はチュウ〜と少しも間違はぬ本來の姿が眞如即ち宇宙の本體であるがさて吾々の迷の眼より見れば其寫る處の境が皆迷ひの姿に現じ様々の相を顯し柳は緑花は紅鳥は高く海は深き其儘の天地の姿を本當に見ることが却々難いので憎いと云ふ心から見れば善い事迄も隠れて見えぬ様になる悲しいと思へば花の綻びて居る姿を見ても鳥の轉る聲を聞いても霞に戯れる蝴蝶の影を見ても何となく悲しさを起す西行法師などは常に厭世的思想を以て居つたから宇宙の萬象盡く悲しさを感ぜられたら〜

西行の月観

なげけとて月やはものを思はする

かこち顔なる我がなみだかな

悲しみの眼から眺むれば天邊に清く輝くお月様までが涙の種になつて來る西行の心には正しくそう映じたのであらう若し羈旅の身として雲山萬里を距てゝ之に對せんか三五夜中滿月之色二千里外故人之心

あまの原ふりさけ見れば春日なる

三笠の山に出でし月かも(仲麿)

の感慨轉々深きものあらむ又人生五十事皆志と違ひ不遇の境に於て之を眺めむか

月見れば千々に物こそ悲しけれ

我身一つの秋にはあらねど(千里)

悲恨の溢るゝものあらむ又之れに反して萬事意の如く得意の人之れを眺めんか

この世をば我世とぞ思ふ望月の

六六

かけたる事も無しと思へば(道長)

斯く同一の月を眺めても或は是を悲み或は是を歡ぶ本來月に悲しむべき相もなければ歡ぶべき相もあるにあらず

悲しとも面白しとも見る人の

心ぞむかぬ月の影かな(文雄)

て何處へ行つて見ても海の果て山の奥にても

月影のいたらぬ里はなけれども

ながむる人の心にぞ住む

全く我々の境遇と果報とが各別であるから主觀的心情の如何に在りと謂ふべし古人の歌にも

手を打てば下女は茶を汲む鳥は立つ

魚は寄り来る猿澤の池

大和の奈良の猿澤の池へ行き手を叩くと御茶屋の姉さんは御茶を汲てくる鳥は驚きて高く空中に逃げ去る池の鯉は餌でも呉れるかと思ふて寄て来る三方面が三様に分れる唯一つ手を打つ音ならば音に變りはないが皆それぞれ果報に依り境遇に依りて様々に分れる如く吾々迷の眼から眺むれば何一つとして實相を見定める事が出来ぬ皆迷ひの種となるのであるが釋尊は

草木國土悉皆成佛

と仰せられ天地法界を盡して迷ふべきものは一つもない佛知見より見れば一物として佛ならざるはない例へば天上に月は皎々と輝ぎ渡つて居るが途中に雲霧があれば其の月を見ることが出来ない併し月が見えぬといふは下界から見ることであつて雲霧を超出して見れば決して月は隠れて居るので無いのであります

六七

日蓮上人の詠れたる歌に

六八

浮雲が障らばさはる儘にして

澄む空高き秋の夜の月

吾々も是の如く眞如の明月は常に輝いて居るが妄想執着の雲霧の爲に、さまたげられ之を知らずに居るのである其雲霧を拂つて明月を見たのが眞の安心とも悟りとも本性とも申すので彼の

無窓國師の詠れたる歌に

雲よりも高き所に出て、見よ

しばしも月に隔てやはある

一旦雲霧を飛び越えて見よ隠れたるとか現れたるとか云ふは眺むる人の見様にあるのだ月輪は何時も常住にして光明を放つて居る、どんな雨天であつても、若し雲の上に出て、見たならば太陽は赫々と天地に輝いて居る悟

りの眼を開いて見たならば吾々は何時も佛様の一大光明の中に包まれて居るのである世の中に悪人とか凡夫とか鬼とか云ふ様な者は一人も無い天地法界が盡く平等一如である只因縁力に依りて差別の相を現はして居るもの、皆假の相にして實相でない假の相は誰れでも見らるゝが眞實の相は容易に明めにくい人の姿で申と彼の人は大層器量がよいとか美しいとか色が白いとかが黒いとか見るのは皆一時的なる假の姿であつて本當の姿ではない骨かくす皮には誰れも迷ふけれどもさて其一皮を剥て見たならば是れぞ美人と覺しき所は更でない「櫻木を打ちわり見れば何もなし花の種とは何を云ふらむ」年々歳々美しく咲き亂れる櫻の木を寸々に分割つて見ても是れぞ花の種と覺しき物は更でない森羅万象皆然りである古歌に

引きよせて結べば柴のいほりなり

とくればもとの野原なりけり

六九

色々な材木を集めて結び構へると一軒の家と云ふものが出来る、すると之は好い家だとか悪い家だとか云ふ假の名がつくが其實は多くの材木が集て出来た假の相であるから其實相を究め来れば定まれる自性は無い本性は無い解くれば元の野原なりけりである、皆吾々の觀念の力に依つて奇麗にも見えるが汚くも見える元來天地の實相は本來無東西である東の方角が好とか西の方角が悪いとか云ふも一時の假相を執する人間の妄想であるから吾々が能く法の實相を悟れば法界平等で有と云て悪人も善人も同じ様に取扱つてゆく譯にゆかぬ賞勳局も裁判所も同じ様に見ることは出来ぬと同じで此が佛教の甚深なる處で平等即差別で聖人もあれば凡人もあり貴賤貧富の等差もあり其差別を取除いて平等と云ふのではない其千差萬別なる其儘が平等なる理體を覺ると云ふのが肝要なる所で一休禪師の歌に

散れば咲きさけばまたくる春ごとの

花の姿は如來常住

とある如く如何に實相常住の佛道とて何も敢て世間をかけ離れてあると云ふのでは、ありませぬ花の散るを見ては我身の無常を觀ぜよと無常に即して常住なることを悟り世間を離せず山中にも隠れずして市の眞中に於て出世の佛道を見るので、それは只一念の轉處にある如何に常住の佛道に入つたからとて死なぬと云ふのではない

櫻は咲くく實相紅葉は散るく實相

と云ふ様に生死去來の儘が直に實相眞如、常住涅槃であるぞと云ふことが知れて來ること、が眞如無相の理をさとする眞如法性の理を顯現すと云ふので此境界に體達すれば阿彌陀如來にも直に御目に掛ることが出来十萬億土も隔る所の極樂淨土も居ながら直に佛様のお淨土となる古歌に

極樂は西にもあれば東にも

吾心が佛様の大明に接觸し信仰の力が増進する時は隨所佛光明で東西南北が皆極樂淨土ならざるはない一心無相の實所に至るものでありまして今迄の無明の昏夜は、がらり東天紅と輝き眞如の日輪は盡十方を照し煩惱の雲を拂ひ初めて平等無我の本體になり切つて本來具有する處の明玉の立派なる本心が現れて世間の假の相には少しも迷はされぬ、粉装したる芝居的の假の姿には少しも動かされぬと云ふ眞固の心を眞如無相の理を覺ると云ふのであります

第四句意

第四句の寂滅爲樂の句をあさきゆめみしゑひもせずと云ふは吾々の煩惱妄想が悉く滅し盡きて五欲の波風が吹き止て心の底まで澄渡り世の中も亦靜かになり色聲の境も迷ひの種とならぬから今迄の様な淺墓な夢も見ませず無明の酒には酔ひもせずと云ふ事で吾々の迷界に沈淪するさまは始終淺墓

な夢ばかり見て居るようなもので無常と云へば無常と云ふ相に苦しめられ常住と云へば常住と云ふ名に束縛せられ苦と云へば苦の爲に繋かれ樂と云へば樂の爲に過まらる迷ひの人の上からは順境逆境二つながら迷を重ねる因縁となる幸福の身分に生れると身分が幸福なるだけ却つて墮落し易し困難な境遇に生れば境遇が困難なる爲に墮落する其の根本に迷執があるから總てが迷執の影となりて丁度敵のない所に敵を作り怨みのない所に怨を結び苦しみのない所に苦しみを設け只此一身にのみ執着して限りのない慾望を起すのである此の吾々の生死輪廻の状態は新陳代謝とて寒來暑往の如く交々互に遷り替るものなりければ其の生れ來ると云ふも恰ながら電光の忽ち空間に激發するが如く見る間もなく消失せてその跡を留めずその死に去ると云ふも且く波浪の海中に止まりて跡形を見ざるやうなものなれば生も死も俱に風を捉へ影を捕ふるが如きものにて人の一生も大きな夢を見る

が如くであり酒と云ふものも之を呑んで酔ふ時は精神も錯亂して物の前後も事の是非も辨へず正心を失ふものなれば丁度幻しの世の中に迷ふて居る様なもので一旦世の真相を明らかに此生死を解脱した上の境界を煩惱の夢も見ず無明の酒には酔ひもせぬと云ふのであります

寂滅とは圓寂の義諸の障り盡くるを寂と云ひ有爲の苦本を絶するを滅と稱し佛教の根本義と申してもよい寂は寂々寥々として静かなことにもつかひ又寂然不動と云ふて心の動かぬ事にもつかひます要するに境の静かなるを寂寥といひ心の騒がしからぬを寂然と申すのです滅は滅盡の義と申して此れは騒がしき心の妄想分別が滅盡したから寂然不動の心性が顯はるゝのである一切の妄念妄想が盡き果てゝ心の安泰になつたのを涅槃寂靜と云ひ寂滅の句を淺き夢みじと和釋せられたのであります是れに就て世間の人は寂滅と云へば直に肉體の死する事だと早合點を爲し佛の一生化畢りて入滅せら

るゝを涅槃と云ふ即ち毎年二月十五日は釋迦如來の入滅せられたる日なるを以て之れを涅槃と云ふに習ふて凡夫の一生有爲の妄想を作り死滅するを寂滅と云ひ苦を離れて佛になると云ふ、然るに生死と涅槃とは各別の法である故に生死滅し畢つて涅槃と云ひ生死は無常を顯はし涅槃は常住を明す此れ小乗の教には自心成佛を遠く求むるから生死涅槃を各別に示し大乘の教には生死涅槃一位であるから生死即涅槃と示さるゝ此は眞如常住の觀成就すれば有爲即無爲の眞理でありて生死涅槃各別なものでないのであるが眞如常住の觀解もなく悉地(成就)を得ざる人の死滅を涅槃と云ふべき義は更でない大小乗教俱に佛の入滅を涅槃と云ふのは依身を滅せられたからではない此の五趣(地獄餓鬼畜生人間天上)の中を出て眞如無相の理に住し不生不滅の寂靜に住する所を涅槃と云ひ凡夫の滅しては寂にも非ず靜にもあらず無始の罪業により此に死し彼に生じ五趣を廻れば苦もあり煩惱もあり

不生不滅の圓寂にあらざ寂滅にあらざであります寂滅の理と云ふは滅せずとも今生に覺れば寂滅である即ち煩惱を消滅し心智を寂靜にして本具する所の自性清淨の眞理を證する時は即ち言葉に云ひ顯すべき術の絶へたる涅槃圓寂の理である、さすれば凡夫の死滅を寂滅と云ひ佛になると云ふのは「華嚴經」に一衆生として眞如の智慧を具足せざるものはないが只妄想顛倒の執着あるを以て證りを得ないのであるから若し妄想を離るれば一切智、自然智、無碍智が則ち現前することが出来るから此等をもて斯くは云ふので煩惱分別の生滅が肉體の滅すると俱に止む其状態を佛性に歸すると云ふの謂ひなるべくこゝが世俗の誤解し易き所で凡夫の死滅は寂滅に非ず偕て涅槃と云ふは梵語として天竺即ち印度の音である之を翻譯して支那の語に引き直せば大滅度とも圓寂とも安樂とも寂靜とも寂滅とも不生不滅とも到彼岸とも申す義になるので之れが意味を解せば

大滅度と云ふは吾々の心の本體を眞如と云ふ其眞如が無明の雲に隠れて眞黑暗に成つて居る之を垢の凡夫と云ふ謂ゆる貪瞋痴の三毒に本心を味まされて智慧の光を失ふて居る故に生より死に至るまで死より生に至るまで身も心も三毒の爲にからまれて居るのである之を流轉生死と云ふ故に生死の大患は三毒の煩惱である其三毒を退治するのが佛法の仕事である彼の三途の川と云ふも三毒の義である生死の大患之より大なるはなかるべし此の大なる三毒を滅して三途の川を渡り越すの義なるが故に大滅度と云ふのである

圓寂と云ふは圓滿寂靜と云ふことにて其無明煩惱の雲が晴れ眞如の明月が皎々と光りて恰かも十五夜の月の如く圓滿圓極になる様子でありて時に又一天晴れ渡りて風聲水音の騒がしき音沙汰も打ち絶へて寂々寥々たる秋夜の景氣は如何にも涅槃の境界斯くやありなんと想像せらるゝ趣き

なるが故に圓寂と申すのである

安樂と云ふは凡夫が三毒の煩惱に使役せらるゝ程苦患なことはない此の三毒が滅して萬徳圓滿なるに到らばそれほど安穩快樂なことはない故に安樂と申すのである

寂靜と云ふは騒がしき三毒の迅風雷雨がなくなりて本有常住の月輪皎々たる様子を寂靜と云ふ

不生不滅と云ふは眞如實相常住不變の佛性は有爲轉變生滅去來に涉らずして三世不改なるものなるが故に不生不滅と申す

到彼岸と云ふは生死の煩惱の此岸より涅槃の悟りの彼岸に到ると云ふのであります

涅槃と云ふは箇様な意味で如何にも遠方にある様なれども決して然らず皆吾々が方寸の間にあることである方寸と云ふは儒者流の解釋で心のある場

處は僅に方寸の間としたものなれども佛教で謂ゆる衆生本具の妙心なるものは大小長短の物量を以て比議すべき所のものにあらず故に大を語れば盡十方微塵數の世界をも含めりと云ひ小を語れば顯微鏡も遠く及ばざる極微隣虚の中にも入るを云ふ此の妙心の働く所の佛法の究竟此を涅槃と云ふのであります

爲樂と云ふは我が心が治まりて清淨の妙體萬徳圓滿なる其の靜なる状態を樂と云ふ樂とは安心の事である佛法の究極人生の歸趣は只安心の二字に歸するので樂にも種々ある先づ地獄に居ても熱鐵に苦めらるゝ處にては涼しき風を樂と云ひ又は餓鬼趣にては無財餓鬼は漿水の名を聞て樂と云ひ畜生は水草を見て樂と思ひ人天は五欲を樂とし佛は寂滅無爲の眞理を樂とせらるゝが兎角樂の中でも佛の樂を以て至極とし其餘のものは苦みが添ふてあるので煩惱あれば四苦八苦があるが今佛の無爲常住の樂は煩惱の眠を醒し

て寂滅常住なれば無明の酒の爲に苦められず決定して安樂なれば爲樂の句
を酔もせずと和釋せられたのであります

あさきとは有爲のことである深いのは無爲で有爲は迷ひて無爲は悟りであ
る「百法問答抄」に浅き位は世間了知の分なり道理と名く至極の位は思議に
及ばず眞理と名くと申してありて世間普通の道理と名くる程未だ人情を離
れず我情を含むが故に無我とは云へない浅果なる有爲の境界を云ふ

ゆめみしとは昔より夢は五臓の勞れ聖人に夢なしなぞと云ひならし夢の種
類を色々といふと説いたのもありますが何れも暫時の弱想である胡蝶百年の間は
長ひが醒めて後は暫時の妄想であつた如し人身は無常なり富貴は夢の如し
とある如く吾々の一生は夢幻の浮世にて貧賤も只一時の出來事に過ぎず富
貴も一時のものに過ぎぬ迷ふたと思つたのも悟つたのも其實は夢
を見て居た様なものぢや迷ふたと云ふは怖しき夢を見た様なもの悟つたと

云ふは樂しき夢を見た様なものである仰て天を望めば天は蒼々として窮り
なく俯して地を臨めば地は厚くして疆なし山川何を以て美なる草木何を以
てか鮮かなる日月何を以て光り四季何を以てか移る人は百穀を播して齷齪
たる雀は熟穂を啄んで恬然たり一として疑問ならざるはなし春花の爛熳た
る秋天の紅葉たる人生五十年誰の豫定する所ぞ生ずる父母も生の由來を知
らず生を受くる我身も亦た死の所去を悟らず過去を顧みれば冥々として其
首を見ず未來に臨めば漠々として其尾りを尋ねず然るを吾々凡夫は日常見
聞せる所習ひ性となり別に怪む心なく只妄想分別に追ひつかはれ夢の浮世
に夢見る様なもので今は昔し唐の玄宗皇帝開元七年日本四十四代元正天皇
養老三年の事で呂翁と云ふ仙術家がありて有る時邯鄲と云ふ町の茶屋に休
息して居ると折しも盧生と云ふ男が龐末な風裁をして同じく其處に来て呂
翁と共に世間話から身の懺悔話に移り人間世界も様々なもので生れながら

八二
榮華榮耀を極めて居る人もあり貧賤より非常に出世をする人もあれば又身分ある人が零落するあり籠に乗る人昇ぐ人さて世の中は様々なもの私は元來農家に生れ鋤鋤を持つて業とする百姓なれど實は青雲の志を懷き學問上の事も研究し何卒一度は高位高官に昇進致し度朝夕望みて居りますが本年は早や四十にもなりましたれど何の役に就かず只僅かに今日を凌ぐ位の事と云ひ睡氣を催して來た時に茶屋の女中は黍を蒸して居りましたが聞きて居つた呂翁は囊の中から一つの枕を取出して盧生に授け言ひけるに貴公がそれほど富貴高官を望まるゝならば一眠りなさるが宜い萬事意の儘に望みが叶ひますと云ひましたれば盧生は寢轉まして自ら夢を夢とも知らず忽ち我家に歸り居りますと數月の後官より召出され渭南郡と云ふ所の下奉行となりました時に清河と云ふ處の豪家崔氏某の女を迎へて妻と致しましたが此の女は才色兩全人に勝れて麗しく何一つ不足もなき美婦人なれば夫婦

の中睦ましく追々立身出世して高官に上達したが事故あつて州郡の下官に貶され三年の後また引立られて待従の官に昇りました其時人の讒言に遇ふて職を剥れ或る地に流されました固より罪なき身の事ゆゑ數年の後天子より呼戻され復た高官を授けられましたが學識著はれて高等官となり位人臣を極め駟馬の車に鞭つて意氣揚々として數多の屬官を指揮し誰知らぬものなく評判も宜しく終に勳功を以て燕國公に封せられ更に此上もなき富貴榮譽を極め其時八十の年を重ね睡れるが如くに命終したと思へば忽ち夢が覺め盧生は茫然として四方を見廻せば下女は黍を蒸してそれがまだ熟せざる間であつた、そこで盧生がつくゞ思ひますには自分は平生の望みを遂げ五十年の久しき間あらゆる榮辱を嘗め終に志の如く富貴を極め歎樂自在に一生を過したりと思ひの外一時の夢なるとは果敢なき事よと嘆息しますると豫て待ち構へて居た呂翁が示して申します様凡そ世の中の人の富貴を

極め其心に適すると云ふも實は皆この通りの事で物に盛衰あり吾身の分限も知らず見るもの聞くものに氣を奪はれ妄りに欲望を貪るのは迷ひであるぞと盧生は此の一語で悟りまして貴方の御説諭にて人間生死の短き貧富貴賤是非得失も皆是れ一時の夢なる事が解りました是れ畢竟貴方が私の慾心を薄せんが爲の教であつたと深く呂翁に謝し我家に歸り家業に安んじたと云ふ是れが則ち邯鄲夢の枕といへる世に名高き話してあります人間の一生は其通りである今は善巧方便によりて無爲の眞理を解すれば煩惱滅して惡業を造せず妄想の夢を見ることなければ淺き夢みじと和釋せられて淺き夢みじとしの字を濁りて讀むのであります

酔もせず

ゑひもせずとは無明の酒に酔ひもせぬといふ事で酒と云ふものは一旦之れを呑んで酔ふ時は精神が錯亂して物の前後左右も忘却し是非善惡長短方圓の差別もつかず眼も聞き足の踏む所も定まらず詞を亂し口に言ふ所正しからず總て事物の眞相を見ることが出来ぬ此が無明である酔ふては此の無明の酒の爲めに見聞覺知に礙れ種々の顛倒夢想の行を爲し覺ては無明煩惱の迷夢を離れ一切の顛倒を遠離し永久に迷執を解脱した所に於て天地の實相宇宙の大道人々具足の本性を現出し佛の境界に證入し佛敎の最大目的に體達するのであるから今は酔べき無明なければ酔ひもせず心の底まで眞如の明月が皎々と光り輝ひて動靜起居之くとして道ならざるは無く吾々が日常親子の間に於て兄弟の間に於て若しくは社會に對し若しくは國家に對し或は忠或は孝或は信義或は博愛の法に違つて活動自在手を擧げ足を移す所にも正眞の佛道が顯現し眞の安心立命を得て所謂活佛法と成り始めて涅槃を究竟すると云ふこととであります

佛敎いろは本義 終

大正四年七月廿五日印刷
大正四年七月廿八日發行

定價金貳拾錢

橫濱市岡野町拾八番地
大八木紋吉

著者兼
發行者

東京市京橋區西紺屋町二十七番地
窪政鉄

印刷者

東京市京橋區西紺屋町二十七番地
株式會社 秀英舍

印刷所



發賣店

橫濱市吉田町 第一有隣堂書店
橫濱市野毛町 金養堂書店

324
457

終